

第九章　ブリタニカ月賦販売戦

一　「学燈」から「学鐙」へ

明治三十六年の一月において、去年一年「学燈」とあつた誌名が又かわつて「学鐙」となった。

「本年より改めたる本誌の表紙は和田英作君が特に仏蘭西より寄せられしものなり、仏蘭西にては目今アールヌーボー式衰へて次第に意匠の源泉に遡りて古きを温ねて新しきとなす由。即ち本誌の表紙は希臘の古陶器の図に由て描かれしミューズの一なるエポスの神カリオープなり。古雅なる趣は頗る掬すべし。又題号の篆文は故簠香門下の秀才加納簠洲氏の筆にして図と相伴ふて本誌の光彩を添えられたり。（因に云ふ、学燈の燈字は本と鐙なり。説文に錠なり、錠中燭を置く故に之を鐙と云ふと。俗、別に燈と作れるは誤れるなり、是に非ず）」

普通に燈はともしび、鐙はあぶみと読み、光明の燈火が、學問に乘る馬の鞍に代つたのかと誰しも思う。近ごろこそ「学鐙」におちついたが、時ありて燈と鐙を混用しているので、惑いを招いたものの、魯庵のつもりでは鐙は燈の古字であり、正字であるから、つまり変更したという気もちは全く無かつたのだ。

BRITANNICA.

英百科全書非常廉價月賦販賣廣告

此種實業の多方面に於て凡そ其事項を網羅せしめ、忘却せる事若くは其便利にして必要と欲する所々を探究する時に當り必ず其事を得んとす。他語を以て之と言へば其便利にして必要と欲する處からざる點こそ廣く世人に歡迎せられ大譽を受けるべきものなり。

且其實際の上にて迂回ならん爲めに業務を終つゝ其跡にはあづかるが如き繁雑なる業務に従事するものと雖も差支參考すべき便宜を以て、廣く本書の利益を普及せんことを空前に記したる企業家れば大方諸君緑々申込あらんことと希望す

第九版全部五十五冊
英代百科全書
迴轉自表

クロース製

竹
 竹
 竹

1000 900 800 700 600 500 400 300 200 100 0

[illegible]

廻轉自在本箱金三十員也

本箱代金は全額御支拂濟の上金拾五
間つゝ二月賦に御支拂の契約可仕候

現金
武金
那金
金
百
七
十五
四
也

月	現
賦	金
拂	拂
金	金
百	百
三	十五
十五	五圓
圓	也

月賦
排金
一百六十五圓

月賦拂金一百八十五圓也

也

以上月賦支拂方法

拂込みの上以後毎

二十六回

等に御拂込にて契

の契約可仕候

ENCYCLOPAEDIA

本書御注文の諸君は左の各項御精讀被下度候

本社は本社印行のエンサクロペヂア、ブリタニカを圖書目録定價の半額を以て日本の購読諸君へ販賣仕度代金拂込の方法は前記の通り全額又は月賦拂(ロンドン、タイムズ日本支社)が確實なる契約者と認めたる方に限る。何れにても御都合に任ぜ前金五圓受取次第全部發送可仕候。

日本一則實語魁に子百部附が、御座候但藝本に際守を主とし其國の榮枯の通し候様出來
全部完成仕居候に付御注文次第何時にても御届可申上候

●本社は日本販賣部數に對しては前項の如く制限せるを以て二箇月後に至りなは貴需に應じ難かるべしと信し候尚本社より便利を謀り積蓄若しくは神戸巨港の船賃及陸揚費も自仕る

爲倫敦實價と差違無御座候本社が如此勉強仕候事は今日迄世界各國何れの處にても未だ曾
て施したる事無御座候

●購読諸君は他書肆の賣直段の半額にて九版廿五冊を買得るのみならず續刊の補遺をも倫敦

●横濱又は神戸何れよりも迅速に御送附可仕廿五冊各一組毎に亜鉛箱にて厳重に包装をせし

置候乍然運搬費用は御自辨可被下候。但横濱及神戸御住居の方へは無賃御届可申上候。

意注

●御贈請の諸君は契約書或は申込書に御調印の上可成全額御送金被下度候間月賦御支拂の場合には金五圓同時に御拂込相成度月賦金は拾圓(指定額)以上御拂込相成も御願意に有之候。御送金は必ず下度候大阪良善株式會社(東京又はニューヨーク)宛にて爲替御拂込被下度候。總ての建物は良善株式會社(東京又は大阪)ラフ・マン・ア・ムス・社・イン・ロンドン、ブリク・ニカ・友紀人宛にて願上候。

横濱市山下町七十番地
大東市日本橋區通三丁目
阪市心齋橋南側

倫敦タイムズ日本支社
丸善株式會社

思うにこの年は商機大いに動いて、花々しい業績をおさめ、丸善の百年史上、その点では他の類例を見ない。すなわち大英百科全書として知らるるエンサイクロペディア・ブリタニカの月賦販売を開始し、それが終わらないのに追っかけてセンチリイ大字典と同じく月賦販売し、似たような辞典だから共食いの懸念もあったが、ブリタニカは五百余、センチリイも甚しくそれに劣らぬ成績をおさめた。当時はダーウィンの「種の起源」が日本の一般購買力としては二円では高すぎ、出版元に交渉して五十銭の廉価版を特製してもらったという時代で、たとえば二円の本が五百部売れても一応の成功とすべきに、これは百何十円という大叢書が、その成功線を突破したとは、驚異というの外はない。

この新年号を開いて、巻頭の赤い色紙広告で、先ず目を射るのが前頁の広告である。

ブリタニカがいつごろから日本に入ってきたか、筆者も知らず、その歴史を究めたら、文化的に価値のあることだろう。明治新文学の暁鐘をついたと云われる坪内逍遙の「小説神髓」のなかの「小説の発達」の章はブリタニカに依ったと著者自身が云い、対比してみても、その然るを知る。だからこれが著作された明治十六、七年ごろ、東京大学の図書室にはブリタニカが備えられていたことがわかる。あるいは、それよりもっと古い例もあるだろう。明治三十年代初頭には、山路愛山、高山樗牛、上田敏などが、早くこれを利用していることが著作でわかる。

しかしこの当時までは、きわめて少数の識者がわずかに、典拠をこれに求めたにすぎないが、丸善の今回の月賦販売は、これを大衆的にとまでは云う能わざるも、広く門戸を開放して、多くの人の手のとどくところに頒布した功績は見落せない。

二 日英文化同盟

この広告で特に注意すべきは、月賦販売となっていることである。月賦販売は、書籍以外の他の品物において、我が国に必ずしも前例がないわけではない。又書物においては予約販売が早くから行われた。しかしその予約販売は、保証のため一冊の前金をとって、これを最後の巻に充当して決済することとし、全部の前払いもあるが、多くは毎月一冊一冊、刊行するに随って払ってゆくのである。

しかるにタイムスは、五円の前金を払っただけで、その二十倍三十倍の価格の大叢書を一度に送りつけてくるのである。もし申込者が悪知恵があつて、品物全部を受とると、後の払込はしない危険が十分ある。

そこで発行者のロンドン・タイムスは、日本支社を横浜に設け、つぶさに調査するとともに、丸善に共同事業とすることを申しこんできた。なにぶん馴れぬ外国での商売の事とて、顧客の選定に自信がもてなかったのである。

丸善とタイムスとの取引は、一朝一夕のことでない。タイムスの本紙の購読者を取りつぎ、そのころ議會での演説でタイムスの社説を精読して自家薬籠中のものとして述べれば、もっとも進歩的知識をもつ政治家として買いかぶられたという話がある。ことにタイムス・ウィークリーとリテラリー・サップリメントは、毎年責任部数をまとめる代り、信じられぬ低廉な特価で、購読できた。(この筆者が初めて注文したころの大正初頭はウィークリー一年十二円ぐらい、リテラリー・サップリメントは九円なにがしかったと記憶する)その上に十九世紀の大著述や、戴冠式カードを記事として紹介され、タイムスと丸善の接近親善は、目に見えていちじるしかったので、この申し

こみを受けたのも十分に理由のあることである。去年締結せられた日英同盟は政治的外交的な関係を緊密にしたのだが、このタイムスと丸善の提携はすなわち一種の日英文化同盟と見ることも非ず。

三　ブリタニカの申込層

なにしろ読書界はじめての、月賦販売という試みだから、さまざまの世評が湧き、毀誉褒貶がおこったのは当然である。なかで最も興味のあるのは新聞「日本」の辛辣な諷刺である。陸羯南を主筆とし、三宅雪嶺を編集の片腕としたこの新聞は、日本主義を唱道する硬派の、最も識見の高い新聞であつた。その記事は――

タイムスの提供する月賦販売の方法は便利だが取りも直さず、日本の識者階級は僅々二百円たらずの書物を一時に買うことが出来ぬと見下げられた意味になる。

しかしいわゆる紳士となると酒色のため、一夜に二百金ぐらい蕩費する例はいくつもある。書画骨董のためには数千金をなげうって惜しまない。僅々二百円の購買力ぐらいは優にあるのである。然らばタイムスはその事情を知らなかったのであらうか。そうではあるまい。

タイムスが相手にするのは読書人である。酒色に数百金、骨董に数千金をなげうつ紳士は初めから相手にしないのである。なぜならこの連中は、ブリタニカを十円で売ると云つても買いつこないのである。日本紳士とはそういう者であることを、タイムス社は知りぬいているのだ。したがって、かの書物に無縁の紳士は問題外にして、日本の読書生のために月賦の便法をもうけたのだから有難いことだ。ブリタニカも誤つて紳士の応接室に飾られるより、

読書生の机上に繙かるるを本望とするだろう云々。

ジャパン・ガゼット新聞が正面からこれに反対したのは、その反語または諷刺の意味がわからなかったのだ。

又新聞によってはこういう非難も出た。タイムスの売るブリタニカ第九版は二十年前の出版で役に立たぬと。これは科学上においては然りといえよう。しかしこの九版は文学、哲学、その他科学でも歴史的記述になると、みな当代著名な学者が署名して、とくにブリタニカのために書いたので、そして単行本におさめないのも、一種クラシカルな価値をもち、その抜刷りがパンフレットとして売られているほどの恒久的生命にあふれている。目下刊行中のブリタニカ第十版は、決して第九版を新たに改訂したものでなく、その補遺である。しかもその補遺は非難多く、とうてい第九版の価値の一定しているのに及ばぬというのが世界の通説であると述べている。

これは非常な歓迎をうけ、最初五百部を予定したが、忽ち七百に超過し、追加の第二回着荷でも応じきれず、三回目の注文を発しなければ間にあうまいと云っている程の盛況である。「学鑑」二月号に、逸早く申しこんだ者の名四十三をあげ、 $\times$ 切を待って、申込者を類別して掲げると云っている。その最初に挙げられた名前は次の如くである。

徳川家達公、徳川義礼侯、細川侯、柳沢伯、秋元子、渡辺国武子、岩崎弥之助男、川田龍吉男、赤星弥之助、岩谷松平、升本喜兵衛、服部金太郎、久米民之助、飯田新七、志賀重昂、尾崎行雄、河野広中、工藤行幹、望月小太郎、福沢一太郎、徳富健次郎、島田三郎、坪内文学博士、広井工学博士、穂積法学博士、平井工学博士、藤沢理学博士、貝島鋳業事務所、川崎造船所、日本鉄道会社、報知社、万朝報社、同文館、博文館、富山房、

參謀本部、會計検査院、陸軍大学校、法科大学、工科大学、華族女学校、大阪府庁、栃木県庁

様々な職業の者があつて面白い。「学鑑」第三号にはブリタニカの予約者として東宮職、山階宮家、有栖川宮家を初め、官衙、会社銀行、倶楽部、学校、図書館、華族、官吏、教師教育家、新聞社出版社、新聞記者、政治家及び両院議員、銀行会社員、商業家、工芸家、民間技術者、医師、弁護士、軍人、農業者、無職家にわかつて予約者を報告し、中には大学高等学校の学生二十二名、外国人十四名、うち清国人二名とある。

総体としてはクロース製が半ばを占め、総革は三十部出ただけであつた。予約者は実業家、工芸家が圧倒的に多いのは、日清戦争後の実業の進歩の尋常でないのを示し、法律、文学、哲学に従事する者が思ひの外に多くないのは、ブリタニカの記事が比較的にその方に疎なるためかと云っているが、そんなことはなく、この第九版はそうした文化記事でとくに優れているとの評をとっているのである。華族の申込の非常に少なかったのは、彼等の読書程度、知識程度を示すもので、医者の方少なかったのはドイツ書を主として読む加減であろう。

じつはタイムスは宣伝に万全を期し、日本の新聞広告料をしらべてみると、外国に比し、ウソのように安い、それで思い切つて全一面の広告をハデにしたので、前にも、例が一、二あるが、しかし全頁広告をふんだんに出したのはタイムスがはじめてと云われる。それを見ると早朝第一に駆けつけて、最初の申込者となつたのは徳富蘆花、第二に手つづきをしたのは伯爵の柳原保恵であつた。小説家では後藤宙外がやっぱり早くから申しこみをしている。予約を切ると、三月四日をもって、ロンドン・タイムスの代表者オット・オー・マキイは、宮中に一本を献上した。総革製にして、各冊にイギリス宮廷の徽章すなわち獅子角馬から成る紋章を打ち、これにめぐらすに数箇の

菊花紋章をもってし、之を光琳式の茎および葉が連続している。これらの意匠はすべて日本美術院長岡倉覚三の手になった。毎冊これを純白なる羽二重で包み、外箱は小沢慎太郎に命じて作らせたので、二段にわかれて下は第九版二十五冊をおさめ、上は増補として刊行中の第十版十一冊をおさめるようになってゐる。本箱の木材はとくに意をもちいて精選し、下部中央に玻璃鏡をはめこみ、鏡面には純金蒔絵をもつて再び菊の御紋章をうかび出させた。箱の上下両部を分つ所に、銀菊金物の把手を付しこれを開けば、一面の板を出して、書を繙く台に使用されるようになってゐる。

メ切後まで、献上をのばしたのは、この献上を自家商業の広告に供したとの非難を避けるためであつた。

宮中では式部長官の三宮義胤が応接して、これを受取つた。彼は明治十年代初頭から独仏の外交官として赴任し、とくに旺然として勃興した社会運動に異常の興味をもつて、その巨頭と来往しげく、留学中の西園寺公望にマルクスを紹介してきたとは、西園寺が晩年におよんで、しばしばした直き話である。果してマルクスであつたか、どうか大いに考証を要するが、そのような人が、明治三十年代に入ると鋒鋷をおさめて、謹直恪勤に宮中に奉仕し、幾多の事跡をのこした。この特殊の知識人によって、献上の手續をとられたこと、ブリタニカに一段の光彩を添える観がある。

四 時代的変遷

ブリタニカの月賦支払は、毎月十円ずつ、十九回乃至三十一回に払込むのだが、この違約者、脱落者が全くなか

ったというのは、今から思うて驚異に値する。最初のこととて、申込者が官衙、学校、商社、個人なら第一級のエリートに限られたためもあるが、明治の紳士はそれだけ誠実だったのだ。

時事新報は、これこそ日本の道徳性の高いのを証明して、今後外国商社の信用も一そう厚くなる好兆だと批評した。日露戦争までの「時事」は日本の代表新聞として、ちょうど今の「朝日」のような位置にあり、言論界の最高權威であった。タイムスと特殊の親善関係にあり、特殊の出版でもあると、「時事」に送ってきて訳載を依頼し、その衝にはよく森嶋峰（晋太郎）があたっていた。そういう因縁で、タイムスが丸善と提携した仕事だけに、時事は特別の注意をはらって、その結果をみていたものと思える。

それが第一次大戦ごろからは、たちの悪い予約者があらわれ、五円の予約金を払って全冊を配達されると、すぐ住所を移転して、これを詐取するものが往々にして現われるようになった。とくに、ブリタニカの版權がアメリカにうつって、終戦後改版せられてからは記事は粗雑、文章は劣悪、取材はアメリカに偏し、これがかつては、その記事が名篇なるの故をもって、抜き刷りをパンフレットとしてまで頒布せられた大刊行物の末かと痛歎せられた。

その販売方法も、丸善を通さず、支社をもうけて、電話をかけての直接交渉で、度かさなるので、そのうるさき事限りなく、中には「先生のアメリカ文学についての御高見を承りたい」というので、ついその話にだまされて引見すると、ブリタニカの購読勧誘員である。しまいには玄関で、「うちは商売がら辞典は必要なだけあるから、これ以上いらない」というと、それを疑うかのように「では一応それを見せて下さい」という無礼きわるものもあった。たまたま買う者には、初めから入会金だけ払って、ブリタニカ一そろいを詐取し、ただちに売りとはす腹の者

が多いから、今や東京の古書街は、そうした曰くつきのブリタニカが洪水をなし、二束三文に近い値段で売られている。物うつり、世がかわって止むを得ないとは云え、ブリタニカの内容と、その取次店と、購読者ほど低落したものは、他にあまりないであろう。

余談に入ったが、ブリタニカは、この三十六年末になって第十版新刊発行を完了しその予約月賦頒売をはじめた。そこで初めから、第九版は二十年昔の古版で、それをもてあまして、日本で半値で捨て売りするのだと考えたものは多く、公然そう書き立てた新聞もある。(そこであわて者の読者は、折角、新年に買ったばかりの九版を、古くて役に立たぬと思つて、古本屋へ売り払ったものもあった)ところが第十版が新着してみると、明白に第九版の補遺と書いてある。云いかえれば九版がなくては、半端物なのだ。ブリタニカ九版は二十年たつても廢物にならぬ良心的記事をあつめ、科学や政治や産業や、当然変化あるものに向つては、二十年間の進歩変遷に十一巻の新記述を増補し、第九版二十五冊、補遺十版十一冊、あわせて三十六冊の大出版を提供したタイムスの篤実誠心の出版ぶりは賞讃敬服に堪えぬ物がある。この十版だけの予約者は二割引、九版の所有者は四割引きとなっている。

大英百科全書第十版(九版の補遺) 予約募集

クロス製 金百六拾円(最初払込金十円也) 月賦金十円宛十五回払込) 金百四拾五円也

背皮製 金百九拾円(最初払込金十円也) 月賦金十円宛十八回払込) 金百七拾五円也

角背皮製 金貳百拾円(最初払込金十円也) 月賦金十円宛二十回払込) 金百九拾五円也

総皮製 金参百円(最初払込金十円也) 月賦金十円宛二十九回払込) 金貳百八拾円也

五 センチュリイ字典と尾崎紅葉

タイムスは一たびブリタニカの予約販売で日本において驚異的成績をあげたとなると、柳の下の鰯をねらい、まだその後始末もついていないのに、新しい相談をもちかけてきた。センチュリイ大字典の月賦販売である。

しかしブリタニカの時とちがい、これには若干の難点がある。元来センチュリイ字典はアメリカで編纂発行したのを、タイムスがイギリス本国ならびに植民地への販売権を獲得した。日本はもちろんイギリスの植民地ではないが、日英同盟のよしみもあって、イギリスの販売勢力圏と考えたわけである。

ところが丸善では、タイムス社から交渉をうける前に、アメリカから直輸入でその品は在庫していた。しかもニューヨーク相場と、ロンドン相場とくらべると、アメリカ直輸入の方が若干安価なのである。ちょうど今はその逆に、同じ「風と共に去りぬ」でもアメリカ版が高くて、ロンドン版が安いのと、真反対であったのだ。

その意味からすると、アメリカ直輸入の品の販売で沢山なのであるが、一つの難点はアメリカ発行元では月賦にしないが、タイムスは月賦にする。少々は高価についても、月賦の方が広く頒布される可能性がある。そこで丸善は、その協力を承諾した。アメリカ直輸入のものを買うよりいささか高くつくことを商業道德上黙っているわけにはゆかないので、それは明らかに天下に公表した。

「弊店従来販売致し候ものは米国版にして隅革製 (three quarter morocco) 正価百二十弗 (即ち日本貨二百四十円) のものを特約して其の半価金百二十円に特別廉売致し居候次第に候。而して其冊数は字彙八冊固

名詞語彙一冊アトラス一冊都合十冊に御座候。然るにタイムス販売のものは本篇の字彙八冊だけにして売価は遙かに之に超越致し候。此度の売価の如き實際倫敦相場より廉価なるにも関はず猶ほ次の如き割合に御座候。」と云って表を掲げている。

- (1) クロース製八冊 金九十五円
- (2) 背革製八冊 金百円
- (3) 特別隅革製十六冊 金百五十円
- (4) 総革製八冊 金二百円

以上は現金売価で、これを月賦とすれば、

- (1) クロース製 最初申込金五円 残金七円ずつ十五回で即ち 金百十円
- (2) 背革製 最初申込金五円 残金八円ずつ十五回で即ち 金百二十五円
- (3) 特別隅革製 最初申込金五円 残金十円ずつ十六回で 金百六十五円
- (4) 総革製 最初申込金五円 残金十二円ずつ十八回で 金二百二十一円

丸善が従来から販売していたものは、以上のうち(2)の背革製八冊百円のものである。しかるにタイムスのは本篇の字彙八冊だけで、固有名詞字彙およびアトラスをのぞいたもので、この二冊を加えると金百二十二円二十二銭となり、丸善の現在売っているものより二円あまり高くなる。月賦ならこの二冊は付かないで、それでいてその価は五円高くなる勘定になる。

しかし固有名詞字彙もアトラスも、多少アメリカに偏している気味があるとは云え、センチュリー大字典を重からしめているものだから、除外するわけにはゆかない。

「斯る次第に候故、弊社はタイムス社の月賦販売を讀書社会の爲め便宜なりとして賛同致し候へども其売価を以て従来の売価より廉なるかの如く顧客の誤解せざらん事を冀申候」

こう明らかに「学鑑」で書かれては、タイムスも自社の不利をみとめざるを得ず、丸善に譲歩して、背革製のものに限り、固有名詞字彙とアトラスを加えて十冊とし、従来の丸善の売価と同じく、ニューヨーク正価の半額の金百二十円で提供することになった。そこで丸善も商業上の徳義として、手もちのアメリカ版は、この期間中、販売を停止した。

センチュリー大字典の月賦販売も亦、予想外の大成功をおさめ、丸善への申込が五百余、タイムス支社への申込が三百、あわせて八百である。「学鑑」は例により、その申しこみ者を、(1) 官衙、(2) 学校図書館、(3) 銀行会社、(4) 倶楽部、(5) 皇族華族、(6) 官吏、(7) 学者教育家、(8) 著述家新聞記者、(9) 政治家、(10) 軍人、(11) 実業家、(12) 工業技術家、(13) 医師、(14) 弁護士、(15) 宗教家に区分けして掲げているが、学校で大和丹波市の天理教校がこれを購入しているのが目をひく。中山正善（真柱）は、ほとんど日本一の書物の蒐集家として聞え、天理教図書館を国中の屈指はおろか世界でも有名なものに作りあげたが、この時はまだ生れておるか、おらぬかであろう。しかしこの教校に、蒐書的好気風が早くからあったのはこれでもわかる。

著作家の中で尾崎徳太郎（紅葉）の名が断然注目をひく。内田魯庵の語るところによると、ある日、店員が、紅

本書の語数は成句熟語の類を合算すれば百萬を越すヨロサー以來の古代語、諺言、土語、邦語、俗語、隱語、隠語、各種專門語、共通外國語、人名、地名、神史野史歷史小説中の固有名詞に到るまで悉く換す處なく有らゆる衆字典を遠大威せしものなり	●總丁數八千百三十一頁 ●説明五十萬 ●引照三十萬 ●地圖三百 ●固有名詞二十萬 ●彫刻畫七千五百	本書は獨り字書として尊きのみならず又サイクロペヂヤの性質をも供へて簡明瞭なる百科全書の説明を與へし項目頗る多し加ふるに挿繪の饒多なる相得つて説明を助け諸／＼百科の尊嚴を得るに毫頭の遺憾なからしめたり斯の如きは本書の一大異彩
凡そ學者の案頭に離るべからざる參考書に類する多種なり普通字典以外人名字書、地名字書、歴史字書、美術字書、文學字書、小説字書、古言字書、俗言字書、隱語字書、方言字書等一々舉ぐるに遑あらず、唯此センチユリイ大字典一部即ち諸々の衆參考書を備ふる繁冗を除くに足るべし	センチユリイ大字典とは如何なるものなるぞや	大英百科全書がサイクロペヂヤの王なるが如くセンチユリイ字典は字書中の大王なり而して大英百科全書を參考する必要より更にヨリ多くの必要を有する此大字典の如き學者の案頭に缺くべからざるもの、以て圖書室の樞軸たるべし又大黒柱たるべし
センチユリイ大字典は之を喩ふれば一萬何千噸の大戦艦なり他の所謂大字典と稱するものの如きは即ち數百噸の砲艦に過ぎず蓋し言語海上に泛べる大雄鎮なり	此大字典の編修職はマックス、ミューレル氏と共に十九世紀後半の言語學界の双璧と稱せられしゴイトニイ博士にして其編輯に與かりし英米の各専門學者數百名、十年の歳月と二百餘萬の巨費を投じて初めて大成したる空前絶後の偉業、十九世紀首語界の一大偉觀、一大寶典、蓋し英語世界の小宇宙とも云つべきなり	英國にて發賣せし部數は二萬、米國にては十萬以上、日本にては正に若干部を需ぐを得べきや、此部數は即ち日本に於ける文明語の勢力を卜するに足るべきなり

センチユリイ大字典広告



尾 崎 紅 葉

葉さんがお見えになっていますという。そんな筈はあるまい、二三日前の新聞に重態がつたえられたばかりだと、半信半疑で出てみると、なるほど病衰で形容枯槁の紅葉が杖にすがって書棚を物色している。

魯庵は、駈け出しのころの紅葉とは、同じ江戸っ子で、年も同年であるところから、しきりに往き来していたが、硯友社一派の通人氣質、俳句をひねって脂さがり、柚子味噌をなめて通がっているようなのが気に合わず、「文の隔てない親善さが出て、なにを求めに來たのだときくと、

「じつはブリタニカを買いにきたのだが品切れだそうだから、センチュリイにしようかと思っている」

という。紅葉の命はもう三か月ともたないと医者から宣告せられているのである。そんな大辞典を求めても、読み、利用する期間はわずかなものだ。長の病養生活で台所もゆたかではあるまいと察し、

「ブリタニカは一か月ほどしたら、注文したのが入荷する。入り次第とどけるから待ったらどうだ」というと、紅葉はしばらく考えたが、

「一か月なら未だ息はあるだろうが、しかし本を手にとってもヒクラ・ヒクラして何がかいてあるやら分らんよ

うでは、しょうがない。読みたい本も読まないで、執着をのこして行つたとあつては、江戸っ子の估券にかかわる」

といって手の切れるような札で一時払いし、

「ええ本だそうだねえ。早くよみたいから、なるべく早くとどけてくれ給え」

といって、踏々浪々として車上の人となった。一しょに食事でもせぬかといつたら、水ばかりしか咽喉を通らぬのだから、君の食つてゐるのを眺めていても仕様がなないと云つてさびしく笑つた。

それから旬日にして、紅葉の死が報ぜられ、これが、紅葉魯庵の最後の会見であつた。魯庵は、露伴と親しく、その紅葉への評価は高いというわけにはゆかぬが、しかし死の寸前まで、世界的著名の新字典ときくと、これを求める飽くことのない攻学心はこれを讃歎して止まぬ。

「学鑑」十月号は大英百科全書（ブリタニカ）第十版の予約募集をまた広告している。これはさきごろ月賦頒布した第九版の補遺を十一冊出版したのでロンドンで完結したから、いつでも注文に応ずる。月賦で第九版の所有者には四割引、第九版を所有せぬ者には二割引きとしている。

さればこの年は、大辞書の輸入に明け、輸入に暮れたといつてもよく、これは吾が出版界を大きく刺戟して、「学鑑」今年の最終号には、左の記事がある。

○エンサイクロペヂヤの流行

本年におけるわが出版界の著るしき現象は、類書すなわちサイクロペヂヤの流行なり。さきには此種の書は

唯だ経済雑誌社の社会辞彙および人名字書、及び富山房の地名字書等数部に過ぎざりしが、本年に入りては有力なる書肆の類書編纂を計画するもの益々多きやに聞く。その既に公けになりしものにては同文館の『教育大辞典』あり、育成会の『社会事林』あり、弘文館の『経済大辞典』あり、板倉書房『日本人名字書』その他所謂十二大文学字書あり。未だ世に公告せられざるものにては同文館の『哲学大辞典』、および『社会字書』、金港堂富山房共同計画の大百科全書等あり。蓋しこの種の計画は、我が学術進歩のため大いに祝すべき事なるが、その争って計画する所以は、大英百科全書の広布が、我が読書界にこの種の大参考書の渴望を促がせしに由る故なるべし」

まさに、その通りと云わなくてはならぬ。丸善が一糸響きを発して、万管これに和せんとするもので、過大の自負ではない。

六 「学鑑」特別号

この筆者より一世代前にうまれ、明治三十年代前半期の文壇を、身をもってくぐりぬけてきた先輩たち（たとえば千葉亀雄、高須芳次郎など）は、よく口をそろえて云っていた。その頃の諸雑誌のなかで、特別号を出して強い印象をとどめたのが二つある。一つは「反省雑誌」の夏期付録（明治三十一年八月発行）で一つは「学鑑」の臨時特別号（明治三十六年五月発行）である。もちろん京都三十年記念号とか、創業何年記念号とかいうのはあったが、その頃には他には特別号を出すというような例は、あんまり無かった。「中央公論」が新年特別号、春期特別号

などを続発したのは日露戦争後のことだし、「趣味」が拡大号という言葉をはじめ作って部厚い雑誌を発行したのも明治四十年代のことで、三十年代前半には絶えて無かったことだから、年月はへだてたと云っても、この二誌の記憶がとくに鮮やかに残ったのであろう。

といって、その内容はひどく差異がある。「反省雑誌」は、西本願寺の機関誌としての平常の宗教的薰染をこの特別号ではすっかり洗い落し、まったくの文芸号として、露伴、柳浪などの諸大家の小説、大学出て数年の高山樗牛、大町桂月などの新星を中心に、色刷りとして正岡子規の俳句、与謝野鉄幹の和歌、国木田独歩の新体詩など、頁数を惜しまず満載した。子規は「ホトトギス」を始めたばかりであり、鉄幹はまだ「明星」を創刊せず、独歩に到っては、新聞記者上りで、小説家とも詩人ともつかぬ無名文人に近いものだった。しかし高山樗牛の寄稿は「わ



明治36年「学鑑」特別号

が袖の記」で、あの評論家にこの哀婉の美文の筆あるかと、みんな驚歎したものであったそうだし、大町桂月のは「かた袖」と題して、彼の後にも先きにもただ一篇の小説だが、やはり及び易からずと思ったものであるという。「学鑑」の特別号は、それらと全く趣きを異にすることは、左の題目をみても分る。

○古代文字の復活

坪井正五郎

○沙翁書史

上田 敏

○机辺閑話

幸田露伴

○支那文字の起原とその構成方法

久保得二

○コロの作画

魯庵 生

○陳列場——（先づ如何なる書を備ふべきや）

善 六

○英訳大陸文学之彙

内田魯庵記

○Zusammenstellung Wichtigster Erscheinungen im Gebiete der modernen

Novellistik und Dramatik.

森 林太郎

すなわちこれは書誌をねらっているので、書物に特殊の興味をもつものでなくては、取りつきにくいですが、そのかわり各篇みな、高度の価値をもつ。

坪井正五郎の「古代文字の復活」は、全く忘失され、埋没し、堙滅したエジプトと、アッシリヤと、ヒッタイトの古代文字が如何にして発見され、又想像を絶する労苦と忍耐と推理の力によって、これを解説した経過を説明したもので、さすがに人類学先覚の大家の研究として、今日もその価値を失わず、いまやギリシャ語やヘブルウ語をよむ人の数はふえたが、エジプト、ヒッタイト、アッシリヤまで興味をさかのぼらせている学者はあまり聞かない。

上田敏の「沙翁書史」は、門末あるいはその崇拜者たちが、わが国では六十年後の今日といえども、これ以上の沙翁書史は出ていないと推称して措かざるもの、たしかにそれは過称でも溢美の言でもない。それまで日本では、シェークスピアの著作の刊行次第など、大して問題にされたことなく、生前に出たものも、死後まもなく現れたも

のも、また刊行者、校訂者、註釈者の如何によって、いかなる変更、改善がなされたかということも、ほとんど問題にせず、五里霧中で、ただ与えられたる本文と首っぴきで取りくんで読んでいた傾きがある。

じつはこの筆者など、教室に坪内逍遙の講義をきき Quarto (逍遙はクォートと発音していた) だの、Folio だのという言葉が出て、それから生ずる字句の差異の説明には、ほとんど注意を傾けなかった。また Variorum だの Farness の集注だのと聞いても、手のとどかぬ高嶺の花として聞きのがしたが、学窓を出て、たまたまこの雑誌の古書入手し、それらの説明をよんで、さてはそういう意味をもったのかと、後になって悟った始末である。

この篇は、一 刊本、(一) 四折本、(二) 二折本、(三) 詩集、二 伝記、三 肖像、四 地志、五 辞書、六 索引、七 言語、八 評釈、九 註解、十 翻譯、十一 会報、十二 出典、十三 雑書、十四 書史、からなる。

面白いのは辞書の項で Alexander Schmidt's Shakespeare Lexikon を推称していること勿論だが、篤学の士あって改版せねばならないといい、間違いの例として佐久間信恭のあげた所によると Daymaid を日雇の婢と説明しているようなことが間々ある。また戯曲の第何幕、あるいは第何場とあるべきを脱漏している例も見られる。佐久間は一々それを訂正して、上田敏に示したことがあり、このような学殖と精力ある学者が、シュミットを増補したら、どんなによいであろうといっている。上田敏にして、よほど推服していると見え、この書史をつくるにも、多く佐久間に質すところがあったとことわっている。

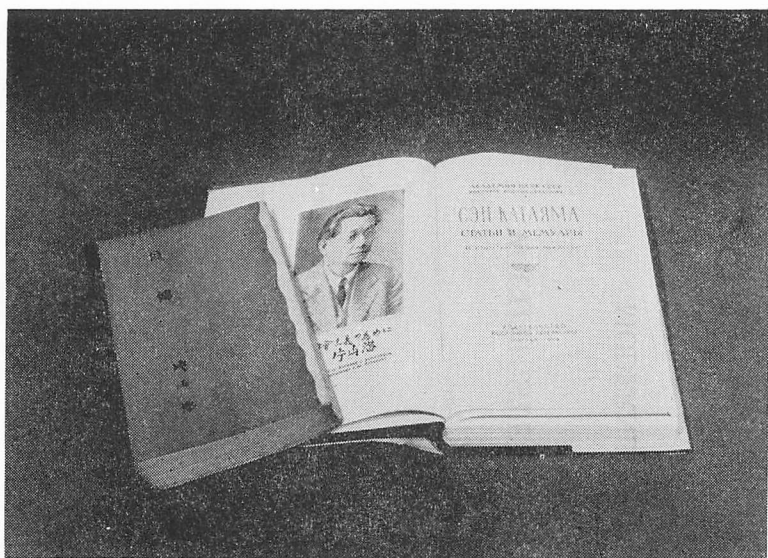
これで端なくも思い起すのは、漱石の「クレイグ先生」という小品で、この篤学の老先生もシュミットの辞書を縦横に塗抹訂正していたと述べている。東西に時を同じうして、同じことをしていた学者がいたのだ。しかしその

註解の部に、日本の官学系の英学者が殊更におとしめて、かかる場合それに言及するも恥とする Deighton を「教科書また独学書として便利ならん」と云って三種あげた中の筆頭においてるのは偏見に捉われず、公平と云わなくてはならない。

これら西洋の古い学問に対する東洋の研究が久保天髄の「支那文字の起原とその構成方法」で、また露伴は和漢の珍書、逸書の漫談をして、その博読ぶりの片鱗をのぞかせている。

たとえば戦後、偽物問題で急に世の視聴をひいた乾山についても、露伴は早くその「竊法和法」を書いた無題竊の写本一冊を、自分もうつして「乾山伝竊法」と名づけて所蔵していると書いている。また美濃の黒滝の潮音という和尚は「先代旧事本紀」と題する七十二巻の偽書をつくり、その中の詠歌本紀二巻には神代から蘇我の馬子あたるの歌まで、古風に舌たらずに偽作している。精力は元よりのこと、相当の学才も歌才もなくては出来ぬことなのに、どうして日本文学史で問題にならぬだろうとも云っている。

また「驚くべき書」という項目は博文館から新刊された「漁魚術」について、「鮒をつるに鰯^{ぶり}釣を用ふべからず」、「鮎は海中に産卵孵化す」「鰻をつる餌をつけるにはもぐらの生きたるを可とす」、また「鰻を漁するには庖刀、或は鋸の背を以て鰻の中腹を打切る也」などの驚くべき珍説が続出すると述べている。初めの三つは、途方もないことと素人にも分るが、最後のは筆者の郷里（美作）などでは晩春初夏の候、現におこなっていることで、夜、松明をともして水上を照らすと、鰻が眠っている、それを鎌の刃、または鋸の背でたいて捕るので、片山潜もこれはその「自伝」のなかに詳述し、モスクワでその本のロシア版も出版されている。筆者は少年のころ、京都府下の農村



片山潜著「自伝」モスクワ版と日本版

でも、この漁法が行われているのを見たから、関西では珍しくない。露伴は魚釣りにかけては天下の名人だが、江戸そだちだけにこれを知らなかったのであろう。

魯庵の「コロの作画」は、徳富蘆花の「自然と人生」の巻末の「風景画家コロ」と併看して興味多く、とにかく彼の入社とともに、丸善の輸入書に、画書が多くなったのが目立つのは彼に画趣味があったからで（その血をひいたかその子内田巖は画史にのこる著名な洋画家となった）「学鑑」に長原止水や、和田英作を起用したのもその嗜好から発したことである。そうした関係から、画家で丸善に出入りする人が目立ちだし、岡田三郎助、結城素明、新海竹太郎、中村不折、山村耕花、高村光太郎などは、最もしばしば見かける顔ぶれであった。この一、二か月後には、北白川宮の銅像をつくって名ある彫刻家新海竹太郎が数年ヨーロッパに学び、ロダンなどにもついて技をみがき、向こうの彫塑の名作の型を多

くもち帰ったので、彼にゲエテ、シラー、ダンテ、ホーマー、プラトー、ソクラテス、シェークスピアなどの石膏バストの調製をたのみ、それを販売している。

また善六の「先づ如何なる書を備ふべきや」は、ウェブスター、スタンダード、チェンバース、ナッタルその他大小数種類の辞書の親切な解説である。

しかし、この特別号の意義あるいは使命を特筆大書せねばならぬのは、それらの諸篇でなくて、巻末につけられた鷗外と魯庵の近代大陸文学の目録集である。

鷗外は *Vorbemerkung* をドイツ文で次のようにかいている。これは簡素明確、ドイツ人も感歎したといわれる名文だそうである。

ZUSAMMENSTELLUNG

WICHTIGSTER ERSCHEINUNGEN IM GEBIETE

DER

MODERNEN NOVELLISTIK UND DRAMATIK.

VON

RINTARO MORI.

Vorbemerkung.

Das vorliegende Verzeichniss der neueren in deutscher Sprache erschienenen Buecher aus dem Gebiete der erzählenden und dramatischen Literatur, die sowohl Originale als auch Uebersetzungen ausserdeutscher Erzeugnisse enthaelt, kann und will keinen Anspruch auf Vollstaendigkeit erheben. Auch haben sich die in Betracht kommenden Erzaeher und Dramatiker keiner gleichmaessigen Behandlung erfreut. Mancher, wie z. B. Gerhart Hauptmann, wird hier fast alle seine Schriften aufgezaeht finden, waehrend von vielen Andern nur je ein Werk namhaft gemacht ist, dessen Auswahl wiederum leider nicht nach Einem Gesichtspunkte geschehen konnte. Effi Briest z. B. wird als die Charakteristischste Fontanescher Dichtungen, Paul Heyse's Ninon aber bloss als Novitaet von ihm genannt.

Unter den ausserdeutschen Autoren befinden sich Einige, die in eigentlichem Sinne des Wortes nicht zu den Modernen gerechnet werden durfen. Manche Celebritaeten fehlen dagegen, weil sie noch keine Vermittler in Deutschland gefunden zu haben scheinen. Ueberhaupt sind die Nichtdeutschen weder mit ihren besten noch mit ihren neuesten Arbeiten vertreten, da es sich um zufaellig vorhandene Uebersetzungen handelt.

Buecher, die nur in einer der wolfeilen Ausgaben, d. h. bei Reclam, Meyer, Engelhorn etc. zu haben sind, sind absichtlich uebergangen.

Sollte diese Zusammenstellung trotz ihrer oben angedeuteten Mangelhaftigkeit von Lesern dieser Zeitschrift hie und da mit Nutzen zu Rate gezogen werden, so ist der Zweck ihrer Veroeffentlichung schon vollkommen erreicht. Tokio, den 20 ten Maerz 1902.

R. M.

Deutsche Literatur : Gerhart Hauptmann.

Berlin, S. Fischer.

Vor Sonnenaufgang. 9. Aufl.

Das Friedensfest. 5. Aufl.

Einsame Menschen. 16. Aufl.

Die Weber. 28. Aufl.

College Crampton. 6. Aufl.

Bahnwaerter Thiel.—Der Apostel. 6. Aufl.

Der Biberpelz. 10. Aufl.

Hannele's Himmelfahrt. 12. Aufl.

Fuhrmann Henschel. 12. Aufl.

Michael Kramer. 10. Aufl. Geb. à Mk. 3.—

Florian Geyer. 6. Aufl. Geb. Mk. 4.—

Die versunkene Glocke. 56. Aufl. Geb. Mk. 4,50.

Schluck und Jau. 10. Aufl. Geb. Mk. 4,50.

Der rothe Hahn. 8. Aufl. Geb. Mk. 3,50.

Der arme Heinrich. Geb. Mk. 5.—

Hermann Sudermann.

Frau Sorge. 66. Aufl. Stuttgart, Cotta. Geb. Mk. 4,50.

- Geschwister. 23. Aufl. Stuttgart, Cotta Geb. Mk. 4,50.
 Der Katzensteg. 45. Aufl. Stuttgart, Cotta. Geb. Mk. 4,50.
 Im Zwielficht. 27. Aufl. Stuttgart, Cotta. Geb. Mk. 3,—
 Jolanthes Hochzeit. 24. Aufl. Stuttgart, Cotta. Geb. Mk. 3,—
 Es war. 32. Aufl. Stuttgart, Cotta. Geb. 6,—
 Sodoms Ende. Stuttgart, Cotta. Geb. Mk. 3,—
 Ehre. Stuttgart, Cotta. Geb. Mk. 3,—
 Johannes. Stuttgart, Cotta. Geb. Mk. 3,—
 Es lebe das Leben. Stuttgart, Cotta. Geb. Mk. 3,—
 Th. Fontane, Effi Briest. Berlin, F. Fontane und Compagnie. Geb. Mk. 7,—
 E. v. Wildenbruch, Koenig Laurin. Berlin. G. Grote. Geb. Mk. 3,—
 H. v. Hofmannsthal, Theater in Versen. Berlin, S. Fischer. Geb. Mk. 5,—
 Isolde Kurz, Von dazumal. Berlin, Gebr. Paetel. Geb. Mk. 5,—
 Gustav Falke, Mann im Nebel. Hamburg, A. Janssen. Geb. Mk. 3,—
 Karl Hauptmann, Aus meinem Tagebuch. Berlin, S. Fischer. Geb. Mk. 5,—
 Max Halbe, Mutter Erde. Berlin, G. Bondi. Geb. Mk. 3,—
 A. Schnitzler, Liebele. Berlin, S. Fischer. Geb. Mk. 3,—
 O. Ernst, Jugend von heute. Leipzig, Staackmann. Geb. Mk. 3,—
 Max Dreyer, Der Probecandidat. Berlin, G. H. Meyer. Geb. Mk. 3,—
 Fr. Lienhard, Koenig Arthur. Berlin, G. H. Meyer. Geb. Mk. 3,—

- Helene Boehlau, Der Rangierbahnhof. Berlin, F. Fontane und Compagnie. Geb. Mk. 5,—
 G. v. Ompteda, Sylvester von Geyer. 2 Bde. Berlin, F. Fontane und Compagnie. Geb. Mk. 12,—
 W. von Polenz, Der Buettnerbauer. Berlin, F. Fontane und Compagnie. Geb. Mk. 7,50
 W. Siegfried, Tino Moralt. Berlin, Schuster und Loeffler. Geb. Mk. 5,—
 Ricarda Huch, Aus der Triumphgasse. Leipzig, Eugen Diederichs. Geb. Mk. 4,50
 H. Sohnrey, Die Leute aus der Lindenuette. Berlin, G. H. Meyer. Geb. Mk. 10,—
 L. Jacobowski, Loki, Roman eines Gottes. Minden i. W., J. C. C. Bruns. Geb. Mk. 5,—
 Gustav Frenssen, Joern Uhl. Berlin, G. Grote. Geb. Mk. 5,—
 M. Kretzer, Das Gesicht Christi. Leipzig. P. List. Geb. Mk. 5,—
 August Sperl, Die Soehne des Herrn Budiwoj. Muenchen, C. H. Beck. Geb. Mk. 12,—
 Friedrich Huch, Peter Michel. Hamburg, Alfred Janssen. Geb. Mk. 5,—
 C. Bleibtreu, Waterloo. Muenchen, A. Langen. Geb. Mk. 6,50
 Wilhelm Boelsche, Die Mittagsgoetin. Leipzig, Eugen Diederichs. Geb. Mk. 8,—
 Ilse Frapan, Schreie. Berlin, Gebr. Paetel. Geb. Mk. 5,—
 Marie von Ebner—Eschenbach, Gemeindekind. Berlin, Gebr. Paetel. Geb. Mk. 7,50
 Emil Strauss, Freund Hein. Berlin, S. Fischer. Geb. Mk. 5,—
 Paul Heyse, Ninon und andere Novellen. Stuttgart, Cotta. Geb. Mk. 7,—
 Ad. Wilbrandt, Ein Mecklenburger. Stuttgart, Cotta. Geb. Mk. 4,—
 Richard Schaukal, Von Tod zu Tod und andere kleine Geschichten. Leipzig, Seemann. Geb. Mk. 3,—
 H. St. Chamberlain, Drei Buehneendichtungen. Muenchen, F. Bruckmann. Geb. Mk. 7,20.

Hollaendische Literatur:

Multatuli, Max Havelaar. 2. Aufl. Minden, J. C. C. Bruns. Geb. Mk. 5,50

Daenische Literatur: Jens Peter Jacobsen.

Novellen und Gedichte. Leipzig, Eugen Diederichs. Geb. Mk. 5.—

Marie Grubbe. Leipzig, Eugen Diederichs. Geb. Mk. 4.—

Niels Lyhne. Leipzig, Eugen Diederichs. Geb. Mk. 4.—

Schwedische Literatur:

Verner van Heidenstam, St. Georg und der Drache. Leipzig, Seemann. Geb. Mk. 3.—

Norwegische Literatur: Henrik Ibsen.

Saemtliche Werke. Berlin, S. Fischer. Geb. à Mk. 5.—

Bd. I: Portrait.—Generalvorwort.—Gedichte.—Prosaschriften.—Reden.—Catilina.

Bd. II: Das Huengengrab.—Die Herrin von Cestrot.—Das Fest auf Solhaug.—Olaf Liljekrans.

Bd. III: Die Helden auf Helgeland. (Nordische Heertahrt).—Komodie der Liebe.—Die Kron-
praetendenten.

Bd. IV: Brand. Peer Gynt.

Bd. V: Kaiser und Galilaeer.

Bd. VI: Der Bund der Jugend.—Stuetzen der Gesellschaft.—Ein Puppenheim.

Bd. VII : Gespenster.—Ein Volksfeind.—Die Wildente.—
Bd. VIII : Rosmersholm.—Die Frau vom Meere.—Hedda Gabler.—Baumeister Solness.
Bd. IX : Klein Eyolf.—John Gabriel Borkman.—Wenn wir Toten erwachen.

Bjoernstjerna Bjoernson.

Laboremus. Muenchen, Albert Langen. Geb. Mk. 5,—
Das neue System. Muenchen, Albert Langen. Geb. 3,—
Leonarda. Muenchen, Albert Langen. Geb. 3,—

A. L. Kielland, Jacob. Berlin, Harmonie. Geb. Mk. 4,—
Jonas Lie, Drauf los ! Stuttgart, Deutsche Verlagsanstalt. Geb. Mk. 4,—
Siegbjorn Obstfelder, Novelle. Berlin, B. Behr. Geb. Mk. 2,—

Finnische Literatur :

Juhani Aho, Einsam. Leipzig, Seemann. Geb. Mk. 3,—

Russische Literatur : Leo Tolstoj.

Der Morgen des Gutsherrn : Der Morgen des Gutsherrn.—Aufzeichnungen des Marqueneus.—Luzern.
—Albert.—Zwei Husaren. Leipzig, Eugen Diederichs. Geb. Mk. 3.—
Die Kosaken : Die Kosaken.—Drei Tode.—Der Schneesturm. Leipzig, Eugen Diederichs. Geb. Mk. 3.—
Sewastopol : Sewastopol.—Ein Ueberfall.—Der Holzschlag.—Begegnung im Felde. Leipzig, Eugen

Diederichs. Geb. Mk. 3.—

Eheglueck : Eheglueck.—Polkuschka.—Leinwandmesser. Leipzig, Eugen Diederichs. Geb. Mk. 3.—
Auferstehung. 3 Baende. Leipzig, Eugen Diederichs. Geb. Mk. 8. 50.

Krieg und Frieden. 4 Baende. Leipzig, Eugen Diederichs. Geb. Mk. 16.—

Anna Karenina. Stuttgart, Franckh. Geb. Mk. 4, 50

Die erste Sprosse. Stuttgart und Leipzig; Deutsche Verlagsanstalt. Geb. Mk. 2,—

Das Reich Gottes ist in Euch. Stuttgart und Leipzig, Deutsche Verlagsanstalt. Geb. Mk. 6,—

Iwan Turgenjew.

Ausgewahlte Werke. Hamburg, Gebr. Behre :

Vaeter und Soehne. 2. Aufl. Geb. Mk. 6,—

Eine Unglueckliche.—Das Abenteuer des Lieutenant Jergunow.—Ein Briefwechsel.—Assja. 2. Aufl.

Geb. Mk. 6,—

Rudin.—Drei Begegnungen.—Mumu. 2. Aufl. Geb. Mk. 6,—

Das adelige Nest.—Drei Portraits. 2. Aufl. Geb. Mk. 6,—

Visionen.—Helene. 2. Aufl. Geb. Mk. 6,—

Ein Koenig Lear des Dorfes.—Fruehlingsfluthen. Geb. Mk. 6,—

Rauch. 2. Aufl. Geb. Mk. 6,—

Skizzen aus dem Tagebuche eines Jaegers. 2 Bde. Geb. Mk. 10, 50

Neuland. Geb. Mk. 7, 50

Stilleben.—Faust.—Die erste Liebe. Geb. Mk. 6,—

Zwei Freunde.—Eine seltsame Geschichte.—Jakow Passinkoff.—Tagebuch eines Ueberflüssigen.
—Hamlet und Don Quichote. Geb. Mk. 6,—

Fjodor Michajlowitsch Dostojewskij.

Raskolnikow. 2 Bde. Berlin, G. Grote. Geb. Mk. 6, 50
Der Idiot. Berlin, B. und P. Cassirer. Geb. Mk. 7,—

Maxim Gorlki.

Gesammelte Erzählungen. Leipzig, Eugen Diederichs. Geb. pro Bd. Mk. 3,—

Bd. I. Einst im Herbst : Einst im Herbst.—Konowalow.—Der Vagabund.—Auf den Floessen.

Bd. II. In der Steppe : In der Steppe.—Malwa.—Bolesj.—Ehepaar Orlow.—Rauhbein.—Das Lied
vom Falken.

Bd. III. Die alte Isergil : Die alte Isergil.—Aus Langeweile.—Tschelkasch.—Makar Tschudra.—
Der Chan und sein Sohn.—Die Busenfreunde.

Bd. IV. Gewesene Menschen : Gewesene Menschen.—Die Blinden.—Jemeljan Pilaj.—Mein Re-
sebegleiter.

Bd. V. Im Gram : Im Gram.—Der Irrtum.—Der Thunichtgut.—Die Sechszwanzig und die
Eine.—Die Straffahrt.

Bn. VI. Frühlingsstimmen : Frühlingsstimmen.—Vom luegenhaften Zeissig und wahrheitslieben-
den Specht.—Grossvater Archip und Lenjka.—Jugendfreunde.—Kain und Arten.—Die Geschichte
mit dem Silberschloss.—Jahrmarkt in Goltwa.

Die Drei. 2 Bde. Leipzig, Eugen Diederichs. Geb. Mk. 5.—
Foma Gordiejew. 5. Aufl. Stuttgart und Leipzig, Deutsche Verlagsanstalt. Geb. Mk. 3.—

Anton Tschschoff.

Werke. Leipzig, Eugen Diederichs.

- Bd. I. Ein bekannter Herr. Erzählungen. Geb. Mk. 4.—
- Bd. II. Das skandalöse Kunstwerk. Erzählungen. Geb. Mk. 3.—
- Bd. III. Dramen: Die Moewe—Die drei Schwestern—Onkel Wanja. Geb. Mk. 4.—
- Bd. IV. Die Bauern. Erzählungen. Geb. Mk. 3.—

Polnische Literatur: Henryk Sienkiewicz.

Quo vadis. Einsiedeln, Benziger und Compagnie. Geb. Mk. 6.—
Familie Polaniecki. Einsiedeln, Benziger. Geb. Mk. 5.—
Sturmflut. Leipzig, O. Grackauer. Geb. Mk. 12.—
Ohne Dogma. Stuttgart, Deutsche Verlagsanstalt. Geb. Mk. 5.—
Ums liebe Brot. Leipzig, K. F. Koehler. Geb. Mk. 2.—

Franzoesische Literatur: Emile Zola.

Stuttgart und Leipzig, Deutsche Verlagsanstalt.
Das Geld. 9. Auflage. 2 Bde. Geb. Mk. 6.—
Der Zusammenbruch. 15. Aufl. 3 Bde. Geb. Mk. 8.—

Doktor Pascal. 2 Bde. Geb. 6,—
 Lourdes. 4. Aufl. 3 Bde. Geb. 8,—
 Paris. 7. Aufl. 3 Bde. Geb. 8,—
 Rom. 8. Aufl. 3 Bde. Geb. 8,—
 Fruchtbarkeit. 8. Aufl. 2 Bde. Geb. 8,—
 Arbeit. 2 Bde. Geb. 8,—

A. Daudet, Die Stuetze der Familie. Stuttgart, Deutsche Verlagsanstalt. Geb. Mk. 5,—
 P. Bourget, Der Schneler. Stuttgart, Deutsche Verlagsanstalt. Geb. Mk. 4,—
 G. de Maupassant, Stark wie der Tod. Stuttgart, Deutsche Verlagsanstalt. Geb. Mk. 5,—
 P. Loti, Madame Chrysanthème. 2. Aufl. Stuttgart, Deutsche Verlagsanst. Geb. Mk. 3,—

Belgische Literatur: Maurice Maeterlinck.

Gesammelte Werke. Leipzig, Eugen Diederichs. Dramatische Werke:

Bd. I. Prinzessin Maleine.

Bd. II. Drei Alltagsdramen: Der Eindringling.—Die Blinden.—Zu Hause.

Bd. III. Drei mystische Spiele: Die sieben Prinzessinnen.—Alladine und Palomides.—Der Tod des Tintagles.

Bd. IV. Pelleas und Melisande.

Bd. V. Aglavaine und Selysette.

Bd. VI. Zwei Singspiele: Blaubart und Ariane.—Schwester Beatrix. Geb. à Bd. Mk. 4,—

Bd. VII. Monna Yanna. Geb. Mk. 3,—

[Philosophische Werke:]

Bd. I. Der Schatz der Armen. 2. Aufl. Geb. Mk. 5,—

Bd. II. Weisheit und Schicksal. 2. Aufl. Geb. Mk. 5,50

Bd. III. Das Leben der Bienen. Geb. Mk. 5,50

Bd. IV. Der begrabene Tempel. Geb. Mk. 5,50]

Italienische Literatur: Gabriele d'Annunzio.

Die Romane der Rose. Berlin, S. Fischer:

Lust. 3. Aufl. Geb. Mk. 6,50

Der Unschuldige. 3. Aufl. Geb. Mk. 6,50

Der Triumph des Todes. 2. Aufl. Geb. Mk. 6,50

Die Romane der Lilie. Berlin, S. Fischer:

Die Jungfrauen vom Felsen. Geb. Mk. 4,50.

Dramen. Berlin, S. Fischer:

Traum eines Frühlingmorgens. Geb. Mk. 2,—

Traum eines Herbstabends. Geb. Mk. 2,—

Die Gioconda. 5. Aufl. Geb. Mk. 3,50

Die Gloria. Geb. Mk. 3,50

Die tote Stadt. Geb. Mk. 3,50

Novellen. Berlin, S. Fischer:

Episcopo und Compagnie. Geb. Mk. 4,50

Feuer. Muenchen, Albert Langen. Geb. Mk. 6,—

Englische Literatur:

Rudyard Kipling, Das Licht erlosch. 5. Aufl. Stuttgart, Deutsche Verlagsanstalt. Geb. Mk. 4,—

Amerikanische Literatur:

Edgar Allan Poe, Die Abenteuer Gordon Pym's. Minden, J. C. C. Bruns. Geb. Mk. 2,—

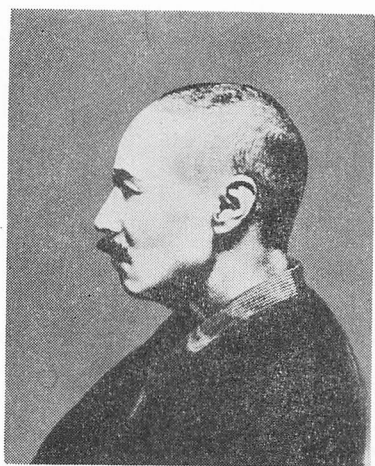
Brete Harte, Cressy. Stuttgart, Deutsche Verlagsanstalt. Geb. Mk. 3,50

— ENDE —

森林太郎編 最新の小説・戯曲類の主要出版目録

— 序 —

ドイツ語で新しく発行された小説物語と戯曲類、ならびにドイツ語以外の創作から翻訳した書物も含めた、ごく新しい目次表であるが、勿論、これで完璧であるなどとは自惚れてはいない。そしてまた、取り上げた小説家や劇作家たちも、充分でなく、且つ均等に取扱われてはいない。なかでも、一例をあげれば G. Hauptmann の様に、殆ど全部の著作があげられている者もあるが、他の多くの著者たちは、残念乍ら、たった一つの作品しか取上げられていない上に、その選択も全般的な見地から観られてないものが多い。例をあげれば、E.H.



森 鷗 外

Brist はフォントナー派文学中、最も代表的な作品として、また Paul Heyse の Ninon という作品は、彼の新作という意味だけで、名を掲げたものである。

ドイツ人以外の著者では、本来現代作家と云えない様な人たちも若干入っている。その反対に、有名人が数多く脱落しているが、それはドイツ国内に翻訳して紹介する者が見当らないように思われるからである。一般に、ドイツ人でない人たちが、その最高作品、或いは最新作でもって代表されてないのは、偶々自分の手元にあった翻訳書を材料につかったからである。

Reclam, Meyer, Engelhorn などの廉価版に依って、たやすく手に入る書物はわざと省略した。

幸いにして、この目録が、上記の欠陥にもかかわらず、学鑑の愛読者諸賢によって、折りにふれ、ご利用頂けるとしたら、これを発表した目的は、完全に達成されたものといえよう。

一九〇二年三月二〇日

東京にて

R・M

(書目の邦訳は省略する)

内田魯庵のは Guide to the Best Works of the Continental Literature (Translated into English) 英訳大陸文学の栞と題し、次のような小引を付している。

「最近の大陸文学を英国に紹介せし者は、Vizetelly 氏を以

て初めとす。氏は最もゾラに推服し殆んどゾラの作の惣てを訳し猶進んで更に露国小説にも及びしが氏以後近年に及びて次第に大陸文学を喜ぶものを生じ Arthur Symons 氏の如き Constance Garnett 氏の如き盛んに大陸の名著を繙訳せる上に、Edmund Gosse 氏の如きは頻りに北欧の美を鼓吹せしかば英国文学は近來著るしく新傾向を生じ將に面目を更むる近きにあらんとす。盛んなりといふべし。

日本にては早くより大陸文学を喜ぶ傾向ありて英語學者すら英文學を攻究する傍ら大陸文學の趨勢を窺ふを怠たらず。Vizetelly 氏の訳の如き遍く読書社會に歡迎せられたりき。此故に英訳せられたる大陸文學の重なるものを紹介するは読書社會の爲め便利にして且興味あるべしと信じ爰にベーカー氏の小説目錄を基礎とし之に戯曲を加へ且最近の出版を補ひて爰に掲ぐる事となしぬ。

爰に掲ぐるものは十九世紀以後とし及び現存の作家の作に係るもののみに限りたり。然れどもゲーテ或はシッレルの如きは苟くも読書人の知らざるものなければ一切之を省く。又デュマの如き最も早くより知られたれば僅に二三の傑作を挙げたる外は載せず。又ベルネ輩の冒險小説或はボアゴベール流の探偵小説の如きは紛々擾々其煩に堪へざれば全く之を除きたり。

バルザック或はトルストイ或はイブセン等著名なる數四者の作は英訳せられたるものの殆んど全部を挙げたれども他に到つては其二三を挙げて余を省きしものあり。此故に爰に掲ぐるものの外猶は英訳數多ありと知るべし。

爰に掲ぐるは小説及び戯曲に限りたれども例へばハイネの如きは我が読書社會に余りに知れ渡りしものなれ

ば之を載せたり。又レオバルデの問答集ドーデの想起録メーテルリンクの蜂の物語ニーチェのツアラツストラの如き小説戯曲の範圍外のものも新傾向或は作家の面影を知るに便りよきものは之を挙げたり。此の如き類少からず。

繙訳者数人ある時は其の最も重なるものを挙ぐ。米国出版のものには杜撰なる繙訳或は抄訳したるもの頗る多けれ共是等杜撰なる訳本は縦令英国訳の既に絶版したる著名の書なりとも却て原作を窺ふに便り宜しからねば粗笨なる米版は多く之を載せず。

此書目は短時の調査に成りしが故に脱陋甚だ少からざるべし。爰に洩れたるものにして著名なるものは他日再び補ふ事とすべし。

千九百三年五月

内田魯庵記

いま鷗外、魯庵両家のあげたところをみると大同小異で、鷗外の方が数が半数に充たないのは、作品鑑選の差にもようが、思うに、ドイツ訳より英訳の方が多く出来ていたのであろう。そこで魯庵の紹介した内容を見ると、
French Literature 一頁約四十作を紹介して七頁、German Literature 四頁弱、Italian Literature 一頁強、Hungarian Literature 一頁弱、Belgian and Dutch Literature 一頁強、Modern Greek Literature 三家三作で六行、Spanish and Portuguese Literature 一頁、Scandinavian Literature 一頁半、Bohemian, Bosnian and Bulgarian Literature 三分の一頁、Polish Literature 一頁、Russian Literature 三頁、Supplement 一

頁、じつに十六頁に及ぶ紹介である。鷗外はイギリスでキプリング、アメリカでボウとブレット・ハートを上げているが、魯庵は全く英米文学を除外している。思うに、今まで幕をへだてて見るような観のあった大陸文学の全野が、かくの如く一眺の下に紹介せられたのは、これが最初である。日本文壇の新機運作興に大きな影響をあたえた。明治文学に近代文学様相の顕著にあらわれたのは日露戦争からで、小説に於ては自然主義、詩においては象徴主義が、この *Sturm und Drang* の中心をなしたのは、史家の公論であるが、それはじつにヨーロッパ近代文学が俄かに全面的に饒多に、英独語に訳され、それが漸く数の多くなってきた横文字読者に、あらそうて読まれだして、英米文学は、英語の専門学者にまかされる形になった。旧伝統、旧道徳を破壊する近代主義の要求があつて大陸文学を耽読したか、大陸文学の涉獵が近代主義を醸成したか、その前後、因果は問わずとするも、大陸文学の流入が日本の思想史を大きく廻転させたことは異論なく、そしてその傾向を予見して「学鐙」が、他の何誌にも先んじて提供した鷗外、魯庵のこの両紹介は、この大廻転の起動力となった。極言すれば、丸善の書棚が、大きく日本の思想的変えたのである。

七 ニイチエ論争

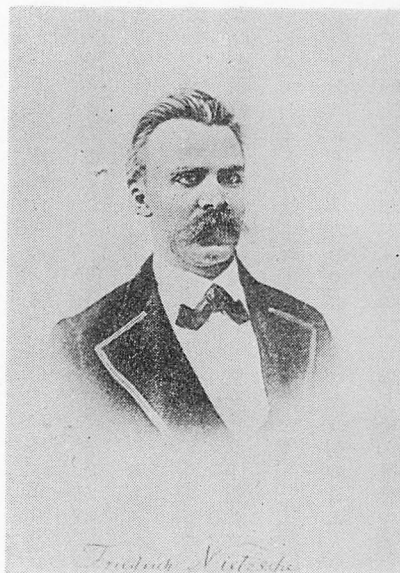
トルストイの紹介には相かわらず熱心で、梧堂山人（おそらくは魯庵）の「トルストイ著作年譜」（学鐙明治三十六年、第九号）は活字になったものは断翰零墨まで掲げ、またトルストイが著作中、あるいは完了しても秘して示さぬ「ハジムラート」「コーカサスの小説」「神父セルゲイ」「ひとつの話」「死屍」「戯曲一編」（これらは死後遺

稿として出版されたもの）まで掲げている。革命後に、完備したロシア文全集が出るまで、これ以上詳細の目録の発表せられたことはなく、トルストイの死んだ時（明治四十三年）「ロシア文学」（米川正夫、中村白葉編集）が、その著作目録を掲げた。昇曙夢所有のトルストイ全集によったということだが、この英訳著作目録の半分にも及ばない。ロシア版では発売禁止、出版禁止のものが多くからである。この英訳目録は「闇の力」の巻後にのせられたものを転載したので、エルマー・モードの作製だ。

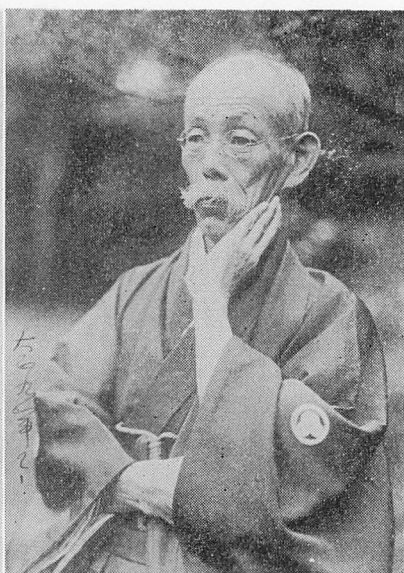
トルストイと対比されるのはニイチェで、「学鑑」は又その紹介にもすこぶる努めた。

いったいニイチェの学説に気づいた最初の日本人は、その人自身の話だが、明治哲学界の大御所井上哲次郎のようで、明治二十九年ドイツ再訪のおりその著作を買い求めてかえったが、内容が日本学界には好ましくならぬと考え、秘して人に示さなかった。しかし明治三十三年、ニイチェの計がつたわると、ジャーナリストでありながら、多年ケエベルに親炙して博識でもあった長谷川天溪が母校の「早稲田学報」に紹介の口火をきった。但しこれは英文雑誌へのった論文の荒筋を語ったので、もちろん独自の研究ではない。それと前後して登張竹風が「帝国文学」に連号ニイチェに関する論文をのせ始め、これはドイツ語専攻でもあり、もち前の情熱家で、光焰万丈すこぶる世の注意をひき、ニイチェといえは竹風、竹風といえはニイチェといつて連想されるようになった。

やや時をおいて高山樗牛の「美的生活を論ず」という論文があらわれ、これは彼の一生の代表作の一つといつてもいいが、美的生活とは自我主義、本能満足主義の主張で「天下の名声も如かず花前一杯の酒」の句に要約することが出来る。



ニ イ チ ャ



坪内逍遙

竹風はこれぞニイチェの再来として、讃歎渴仰の辞をよせ、中学高等学校の学生のあいだに樗牛崇拜熱の流行した時代だから、青年は滔々としてその傘下に入った。

これをみて、にがい顔をしたのが坪内逍遙である。彼は思うところあって、しばらく文壇に見切りをつけ、早稲田中学の教頭となって、実践倫理（修身道德）の研究と教育に全勢力をそそいでいる最中であつたが、自分の教える学生をはじめ、天下幾多の英才が、自分の教えるのとは真反対のニイチェ主義の信奉者になるを、黙って見ておられず、ついに読売新聞に匿名で「馬骨人言」（馬の骨人の如く物を言う）という諷刺嘲罵の文をのせること月余、「とか何とか仰有いましたかね」というような調子で、ニイチェの説の梗概を説き、それを右から左から木っ葉微塵にやっつけた。文壇はその学殖におどろき、いずれ名家の変名だろう

とは察したが、まさか劇作家の逍遙の筆と思わず、高山樗牛なども、あるいは逍遙門下の島村抱月あたりではないかと疑っているうちに、段々と逍遙その人だとわかって来た。

「逍遙ならば吾が好敵手なり。公然と名のり出でなば、応戦せん」

といったが、逍遙はニイチエ流行の本源はむしろ竹風にあるので、攻撃の目標をそれに向けた。それで竹風反駁し、逍遙仮面をぬいで再撃し、この前の逍遙、鷗外の「没理想論」、逍遙、樗牛の「史劇と歴史画の論争」、そしてこの「ニイチエ論争」は明治の三大論争の盛観をなしたので、ニイチエの実質は知らずも、その名はあまねく都鄙に喧伝した。

この論争の最後に、竹風が「今日ドイツ語をよまぬ者がどれだけニイチエの事を知り得べきや」と云ったのに対し、逍遙は立派な訳者によって「その主著は悉く英訳されおるを知らずや」と応じたところ、竹風はただちにそれに噛みついて、「そんな事は聞いたことがない。もし無根の事を公言して天下を欺いたのなら教育家としてゆるせない」といい、逍遙もこれには答えなかった。そこで世は、ニイチエの主著の英訳はそろっているのかどうか、これを疑問とした。

ここに「学鑑」のつくすべき役目がある。ドイツ原文でこの時ニイチエ全集が果して何冊出ていたか、またその中の何冊が英訳全集として刊行されていたか、これが裁決を下し得る立場にいた者が丸善である。

これより前、島村抱月は早稲田文科第一回の海外留学生としての命をうけ、笈を負うてイギリスに赴いたが、故国を去ったのが、丁度ニイチエ論争の燃え上っている最中であつた。老成堅実なる学界は逍遙に加担したが、年少

血氣の青年層は圧倒的に樗牛、竹風支持である。ことにニイチエの英訳全集が出て、主著はその中に含まれているのか心もとなく、師逍遙の旗色の悪いのを心配してロンドンについたのである。そして漸くあの地の風物に馴れ、その思想界がわかつてくると、「思想問題」という長編の論文を起稿し、イギリス評壇の現状を報ずるに擬して、じつはニイチエ問題を取上げ、逍遙が主として竹風を相手にしたのに対し、抱月は樗牛を目標として、痛烈辛辣に揅撃して、はるかに師に応援した。その語気の鋭さは、竹風をして「平常溫厚なる君にしてこの言あるかを疑う」とまで云わせたのである。しかもその寄稿が「新小説」に発表する一カ月前に、樗牛は病を以て逝き、この抱月の文を見るに及ばなかったので、礼儀の正しい抱月は、生きる者を批判するには急所に一刀を加えるを要するが、死者にたいしてはそれ相当の礼儀をつくさねばならぬ。時所合期せず、身世蹉跎の感、思わず自分をして愴然たらしめた、その「思想問題」を単行本に収める時には付記している。ニイチエをめぐる明治論争史の最大悲劇である。その抱月のロンドンからの寄稿のなかに、英訳でニイチエをよむ者に、どれほどのことがわかるかとホラを吹いたものがあるが、今出ているのは全集の三巻で、ことに評判がいい。ニイチエを知るにこれで不足はないと云っている。

しかしドイツ全集が何巻ある中の英訳何巻か、またその訳者の信用程度はどうか、これらの点にいたっては、抱月の文は何の報ずるところもない。

「学鑑」はニイチエについては、十九世紀大著の中にも名があがっており、その号に戸川残花のニイチエと題して「なみなみと玉子酒召す博士哉」の川柳ものっており（樗牛を諷したのだろう）

又昨年第二号の「学鑑」の雑報には「ニイチエ論」と題して

「昨年の文壇における壮観はニイチエ論なりしが、恐らく此論はなお当分決定し得ざる問題なるべし、登張学士はなおニイチエ伝および論を公けにし、更にザラツストラを翻譯せらるる由なり。坪内博士も亦更に筆硯を新たにしてニイチエに関する大論文を書かるる由なれば、本年に於けるニイチエ論も必ず目鮮らしきものあるべしニイチエの毀誉紛々として定まらざるは歐洲に於ても同様なれば、この際篤学の学者は奮って研究して、その意見を聞はし、世の読書子をして徒らに岐路に彷徨せしめる事なからしむるは肝要なるべし」

といって、商業機関の雑誌にはふさわしくない積極的関心を見せている。登張竹風は「馬骨人言」に憤激したから「ツアラトストラ」の全訳とニイチエ評伝を著作すと公約し、逍遙はこれに応じて、結構だ、片々たる評論よりその方がいい。それをみた上で、自分もまた倫理上の一新著をなすであろうと云って、二人の論戦は喧嘩わかれになったのである。

「学鑑」はやや、おくれればせの観はあるが、この年第二号に善休（魯庵）が「フリードリッヒ・ニイチエ」の一篇をのせ、長篇ではないが経歴、思想、評価の概略をのせ、一般読者へ与える知識としては間然するところなき好篇である。問題のニイチエの著作にいたっては

Die Geburt der Tragödie aus dem Geist der Musik (1872) を処女出版するといひ、全集八巻のうち七巻の標題をあげている。

(1) Unzeit gemässe Betrachtungen

(2) Morgenröte

(3) Also sprach Zarathustra

(4) Jenseits von Gut und Böse

(5) Zur Genealogie der Moral

(6) Nietzsche Contra Wagner

(7) Der Antichrist

その中進行中の英訳全集三卷（島村抱月の報じた）に包括せられているのは次の如くである。

Vol. I A Genealogy of Morals. Poems. Tr. by Wm. A. Haussman and J. Gray

II Thus Spake Zarathustra. Tr. by Alex Tille

III The Case of Wagner. Nietzsche Contra Wagner. The Twilight of the Idols. The Antichrist.
Tr. by Th. Common

これを対比して、その当時英語にてニーチェを読む何程のことがあろうと冷嘲する者はあるか、あるいはニーチェの主著は全集として残らず訳出されて、その思想を了得するに妨げなしと弁駁する者非なるか。考えようであろう。なお「学鑑」は

「右繙訳者は何れもニーチェ研究会の会員にしてニーチェの造詣深ければ普通訳文と同一ならず、その中テイ

ルレは元来独逸人にして英国に居住するもの、著わす処“Von Darwin bis Nietzsche”あり。コンモン亦最も篤学なるニイチェ崇拜者なり。著はす処“Nietzsche as Critic, Philosopher, Poet and Prophet”はニイチェの選集にして研究者の階梯とするに足る好書なり。

ニイチェの伝記、その妹の著はせる“Das Leben Nietzsche”最も読むべし。チーグレル (Ziegler) の“Friedrich Nietzsche”又簡便にしてニイチェを知るの手ほどきとすべし、前に掲げたるティルレの『ダーウィンよりニイチェ』も好著として推奨すべし」

これで見ると、その英訳は当時として最も信用できる良訳といって島村抱月の報じたのは、まちがいでない。高山樗牛は、逍遙の拠った参考書がチーグレルであるのを指摘しているが、近ごろの若い研究家の調査によると、樗牛が「美的生活を論ず」その他の論旨や引用は、やっぱり主としてチーグレルによったものだと言報告している。してみると、逍遙も樗牛も、どちらもお互さまというところだ。尤も何をよんでもそれは差支えない。只その結果が学界に貢献し刺戟したこと大ならば、ドイツ原書で読もうと、英訳であろうと、それは少しも問題でない。原文で全集はおろか、断翰零墨まで研究し、一字一字虱つぶしに吟味しても、世に貢献するところなかったら、その読書は社会的に無価値で、まちがった書で読もうと、誤読しようと、影響がよき結果を産めばそれでよい。フィッツラルドの「オーマア・カイヤムのルバイヤット」、キイツの読んだホーマーの英訳のような例もある。なお逍遙の「馬骨人言」をつぶさにみると、彼のよんだニイチェは主として「ツアラツストラ」のほかに、あの論文の構成からみて、コンモンの「批評家、哲学者、詩人、予言者のニイチェ」に負うところが多かったように思われる。

しかし論争のまっ最中、その颯風の目の高山樗牛が、秀才多病で急死して、勝敗も結末もつかず、中止の形となった。それから満一年たって、明治三十六年十月、彼の死を惜しみ、遺風を偲ぶ人たちによって樗牛会が結成せられた。発起人は長谷川誠也、登張信一郎、畔柳都太郎、桑木嚴翼、藤井健次郎、姉崎正治。みな帝国大学文科における同学の友だが、ひとり異色は長谷川天溪で、彼は早稲田の出で、多分講師としてその学園を教えた樗牛にならった学生だと思えるが、博文館の編集局に同僚として机をならべ、ともに「太陽」に執筆した縁で加わったのであらう。賛成人は十九人、樗牛を特に眷顧して大学講師の席を与え、年少にして文学博士をあたうるに骨を折った恩師の井上哲次郎を筆頭に、仙台二高時代学才を競うた井上準之助、新城新藏、博文館主の大橋新太郎、日蓮の縁の田中智学などさまざまの顔ぶれの中に、死の直前までニイチエ論争の論敵だった坪内逍遙が加わっているのは、それだけ見ると異様だが、じつは逍遙は、樗牛が二高学生時代、校友会雑誌にかいた論文から、夙に注目して早稲田文学に紹介し、東大に先んじて早稲田の講師に招いて、美学の担当を依嘱し、先輩後輩の關係はありながら久しく二人は親善で、鷗外のハルトマン紹介には厳しい批判を加えて、ついにそれを沈黙せしめた樗牛も逍遙には兄事した。只最後にニイチエ論争だけは、腹におさめかねて、それから二人の間にいささか不和を生じたと伝えられているが、死後においてはもちろん、温厚の逍遙がそれにこだわる筈はない。

魯庵は樗牛の才華煥発を奇とし、樗牛も魯庵の小説評論には好意をもっていたので、十九世紀大著選評の時も、特に「太陽」における樗牛の評論の全文を「学鑑」に転載しているほどだ。そこで樗牛会がうまれると、「学鑑」はすすんでこれを報じ、主旨、会則、発起人、賛成人、寄付講演のことなど全文を余さず掲げている。樗牛などが

主唱となって創刊した「帝国文学」以外に例があるまい。まるで「学鑑」あるいは丸善が片棒をかついでいる仕事のようにさえ見える。

登張竹風は、豪語したニイチュ伝と「ツアラツストラ」全訳に一向着手する風なく、荏苒として数十余年をすぎ、その空言を世から冷笑せられた。かえって大正に入って和辻哲郎の「ニイチュ研究」、生田長江の「ツアラツストラ」全訳、つづいて幾年をかけて全集の翻譯、金子筑水の「悲劇の出生、善惡の彼岸」などが出て、竹風のお株をうばい、世は竹風がニイチュを忘れ、これと絶縁したのではないかを疑うた。

ところが大正十年にいたり、突然沈黙を破って「ツアラツストラ」の翻譯を、約束の日から幾十年目に公けにした。「光炎菩薩如是我聞」という題が世を驚かし、世は彼の頭腦の健全を疑う者もあったが、浄土真宗に帰依し、親鸞の教化によってニイチュを独特に解釈したので、実に朗々として高唱すべき名文である。原文と対比してみると、仏教用語が原語のイメージをこわすところもあるが、さすがに生涯をかけての研究蘊蓄は、随所に光彩を発揮し、尋常一様の語学者だけでは、到底いたり得ぬ深妙の味読が見られる。惜しいことに一部で未完のままに終り、のちに又その仏教的薰染を悉皆剝落しつくした口語体の全訳を公けにした。公約に忠実だったのには敬意を表さずにはおられぬ。

ところで最近ここに奇怪なのは、中央公論の「世界の名著」の「ニイチュ篇」である。訳者は手塚富雄博士で、ドイツ語学において非凡特殊の才能を有し、文芸思想の教養も治博の篤学者だから、これ以上の訳者はのぞまれない。ただ問題なのは巻頭の解説で、日本に於けるニイチュを説くに、わずかに大正以後に劃ったのは、どういふも

のであろうか。明治時代への言及は一言もないが、大正以後のニイチエ研究は、より深く、より正確になったのであるとしても同人学者間以外に、世はほとんど知らない。これに反し樗牛、竹風対逍遙、抱月の論争は文壇学壇はおろか、有識界こぞって瞠目し、ニイチエを日本に植えつけたことで、これ以上の業績はなかった。そして「学鑑」も又暗黙のうちに、驥尾に付して一役を買っていることは、今後比較文学の方面で、日本に於けるニイチエ文献を作成する篤学者があらわれれば、見のがしてはならないであろう。

八 邦書の大出版

丸善の丸善たる所以は、洋書の輸入にあること、云うを要しないが、しかし月々、わが国の著作も何点か刊行しないことはない。それは字典、語学書あるいは中、高等学校の教科書、参考書などが多く、他には科学、機械、地理、地図、農学など広汎な分野にわたり、みな堅実な好著、佳著の世評を博したが、それ以上にぬきんずる大著述はほとんどない。しかしこの年は年末にあたって明治財政史編纂会「明治財政史・一名松方伯財政事歴」全十五冊、一万五千頁の刊行を予告した。これまで旧著を集成して叢書となしたものでは、頁数でこれを越すものはあつたろう。しかし一つの題目を中心に、かくも豊富の内容と、厖大な外形をもつ書は、全く類例を絶し、明治空前の大出版と云わなければならぬ。その広告全文は大略次の如くである。

いささかタイムスのブリタニカの頒布方法にならうて、予約としたが、ブリタニカは出版の完了したものを、申込金とともに一時に受取る月賦方法だが、当時のまだ幼稚な日本の印刷事情では、十五冊の大冊を完成して一時に

豫約募集廣告

明治財政史編纂會藏版

詳細なる豫約方法日本郵政省
特入御申込されは實に郵政省

明治財政史

正價五冊

一名松方伯財政事原

松方伯は明治二十年、海軍卿を勤王とされ、阪谷山本、相模、高橋、森田、梅生、山田、山田等諸君と共になり、明治財政史を編纂する。松方伯は、阪谷山本、相模、高橋、森田、梅生、山田、山田等諸君と共になり、明治財政史を編纂する。松方伯は、阪谷山本、相模、高橋、森田、梅生、山田、山田等諸君と共になり、明治財政史を編纂する。

豫本體裁 全十五冊 紙版 約一萬五千頁

豫約代價及甲種 本年十二月五日迄に一時払 金廿五圓
拂込方法 乙種 申込の日より完成期迄に五回払 金三十圓

法 豫約期限 二月廿五日限り 四回後は必ず重價に換す
要不出來期明治廿七年二月より十二月迄に全部完成す

送本 市外三回臺灣六回郵費別算
東京市日本橋區通三丁目

豫約申込所 丸善株式會社
大阪心齋橋筋南側四丁目

丸善株式會社
丸善株式會社支社

「明治財政史」学鑑廣告

配布することなど望むべくもないから、来る明治三十七年の三月から十二月までに九か月を以て完了する予定と発表した。正価は三十五円だが、予約者には次のような便法をとる。

予約甲種 本年十二月廿五日迄に一時払

金廿五円

乙種 申込の日より完成期迄に六円宛

五回払 金三十円

当時の日本の経済水準から云ったら破格の高額だが、しかし初めからこれによって儲ける気のない文化的出版だから、この知識が国民有志にいくらかでも普及し、この記述が後世まで保存されればいいので、いわば名山大沢に蔵すべき大著述で、決してその価格を恥しめない。

丸善が自社で企画したものでなく、寄托を受けたのだが、しかしこの寄托を受けたということだ

けでも、丸善の財界から受けた信用を裏書きするものと云えよう。

果然これは、出版当時より、第一次大戦後、わが学界に新たな力を以て経済学が隆興し、明治文化の研究が新脈搏をうち、また左翼学者が日本経済の徹底的再検討に着手すると共に、無上無尽蔵の資料として珍重し、利用されるに至った。

しかしそれは決して、この書が無謬無欠陥であるということの意味しない。そのような書籍はある筈がないが、この書はことに大きな偏向を有し、資料としては有力でも、決して公正ではないので、その点は経済批評家のつとに痛烈に指摘したところである。梅沢慎六の「今様方丈記」(昭和三十二年六月)は、ことにこの書の片手落ちを暴露して、あますところがない。

「明治財政史には故意か偶然か、中央銀行創立に関する大隈伊藤の建議には一言半句触れていない。中央銀行設立に関する大隈伊藤の建議と、松方が内務卿または大蔵卿としての建議を比較検討するに、其手段方法枝葉末節に於ては兎も角、中央銀行設立という其の大本に於ては敢て異なるものあるを見ない、然るに同一事項に付前任者が建議し、而も閣議決定事項として引継がれたものを、同巧異曲大同小異だとしても、かかる重大事項につき、明治財政史が全然言及することなきは洵に不可解である。以前にこのような建議もあったぐらいは記載すべきではなからうか。

而もこの史実は昭和の初頃、当時帝室の編輯官であった史家渡辺幾治郎氏が、内閣記録を検討した際、偶然に発見したということだ、益不思議のことというほかない。

明治財政史の第一版は明治三十六年十二月発行された。題して「明治財政史」「一名松方伯財政事歴」という。而して明治財政史編纂会蔵版とあり。費用も民間の寄附に成るとあるが、阪谷芳郎を委員長とする大蔵官僚の手に成り、事実上所謂官選である。

明治財政史には巻頭に松方の題辭、委員長阪谷の序に次で「松方伯略伝」というのが載っている。この略伝を一瞥すれば、この書が如何なる意図に依って編纂されたか、すぐわかる。端的卒直に言えば、明治財政史は、「一名松方伯財政事歴」と歌っているように、松方の頌徳碑なんだ。これも松方がやった。あれも松方の創意だ。松方就任前は斯も紊乱していたが、松方がこの通り奇麗に処理したという書き振りなんだ。すなわち松方の功績を、弥が上にも顕彰せんとする底意がありありと窺える。幾ら頌徳碑としてもチョット行過ぎているよ。うだ。」

そして中間いろいろな歴史的記述をはさんで、この書の批評に入り

「明治財政史には、松方の不換紙幣整理のことを大々的に歌っている。しかし不換紙幣濫発は、何も大隈の失政から来ているのではない。西南戦争戦費支弁のため、已むなく増発の余儀無きに至ったのだ。それがためインフレともなり、経済界の混乱ともなった。然し大隈はそれに就て幾多の手を打っている。彼は明治十三年五月財政経済の根本的立て直しを策し、「通貨の制度を改めんことを請うの議」を建議している。それは外債五千万円を募集して不換紙幣を償却し、通貨を改めて正金流通の世になさんとするものである。然るにこの建議は外債は国家の存立を危うすると為す、保守派の為に斥けられ実行されなかった。そこで彼れは、次善の方策

を案出してそれを実行した。これが有名なる大隈の紙幣銷却の五策である。五策の細目は此所では省略するが、このことを見ても、彼れが如何に紙幣銷却に努力したかがわかる。然るに明治財政史は之等につき殆ど言及することなく、大隈を無為無策とし、恰も不換紙幣増発の張本人とするが如き貶しようである。大隈が明治十四年伊藤と共に一大中央銀行を創設し、紙幣整理の実を全うし、兌換制度の基礎を確立、財政金融の根本的改善に着手しようとしたことは前述した通りであるが、不幸同年十月の政変のため台閣を追われ、彼の志業は一朝にして挫折、ひとり松方をして、其の名をほしいままにすることとなった。而も大隈のこれ等の施策は、全く抹殺して彼れ一人其の功に誇っているのだ。」

これは正にこの通りである。

元来、丸善と大隈の関係をみるに、直接には大隈が「政治年鑑」や「リテラリー・ダイジェスト」を購読していたことがわかっている程度で、密接とは云えなかったかも知れぬが、しかし大隈は、丸善設立の外護の恩人なる福沢諭吉とは無二の交友があり、終生あらそったことなく、死後、陰で人に語るにもつねに「福沢先生」と呼んで、かりそめにも呼びすてにしたことがない。さらに早稲田大学の図書館、学生の教科書、文明協会の翻譯刊行事業などで、丸善から圖書を購入したことは膨大なる量にのぼり、第一流の得意であつたろう。これに反し松方と丸善との関係は、皆無に近いといつてもいい筈だが、その松方財政の頌徳表を出版し、大隈の功績を無視する結果になっているのは、一見奇異に見えるが、しかしこれは、丸善が縁故によって動かされず、世益ありと見れば、無縁の政治家の伝記記録でも出版したこと、むしろ情実にとられぬ商売をしていたことを傍証するであらう。

九 紅紫繽紛の店頭

この年十一月の「学鑑」には「絵葉書の流行」と題して、左の記事がある。

「近時我が国にても絵葉書非常に流行しおれるが昨年中の統計に由れば独逸は世界中第一位を占めて十一億三千五百万枚、第二位は合衆国にて六億七千万枚、日本は之に次ぎて四億三千五百万枚、またこれに次ぐは濠洲二億五千万枚、仏蘭西六千万枚、白耳義五千五百万枚、瑞西四千三百万枚なり。英国にては従来使用するものはほとんど無かりしが近來は漸くその流行を生じ昨年中はずいぶん盛んに行はれたれどもなお前記の諸国に及ばず昨年中の統計は未だ明らかならず」

じつは日本でエハガキの用いられ始めたのはこの数年のことである。その証拠には、明治三十三年ベルリンの東洋語学校教授としてドイツにおもむいた巖谷小波の通信に、あの地のエハガキの盛んなのを報じて、日本ももうそろそろ、白ハガキに謹賀新年とだけ書く没趣味な風はやめて、風雅な趣向のエハガキの年賀状にあらためるべきだと忠告したのがある。それから二、三年ならずして、エハガキの流行が世界の三位にのし上っていること、その美術趣味を慶すべきか、軽佻を悲しむべきか。じつは丸善は前年、絵葉書をつくった。それは坊間にひさぐものが余り低劣で、外国製にくらべると、甚しく見劣りがする。意味なき風景、ことに芸娼妓の写真の流行は、醜業婦だから外国旅行者に買われて恥しいと考えた魯庵は、親交のあった結城素明に依頼して十二枚一組を刊行した。

第一は推古式意匠で上方は因果経絵巻物、下方は天寿曼陀羅、第二は法隆寺模様で奈良古文書と東大寺および薬

MOST BEAUTIFUL CARDS



12 Cards, in

Price

Japanese Orna-
ments . . . Picture

HISTORICALLY ARRANGED



日本歴史

(萬國聯合)

六枚宛二冊十二枚

精鮮優美無双

極彩色

結城素明氏圖按

EVER PRODUCED IN JAPAN

Decorated Cover.

yen 1.10



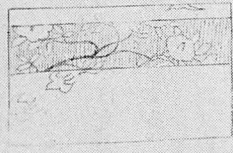
ments . . .
Post-Cards

BEAUTIFULLY RICH-COLOURED

的意匠繪端書

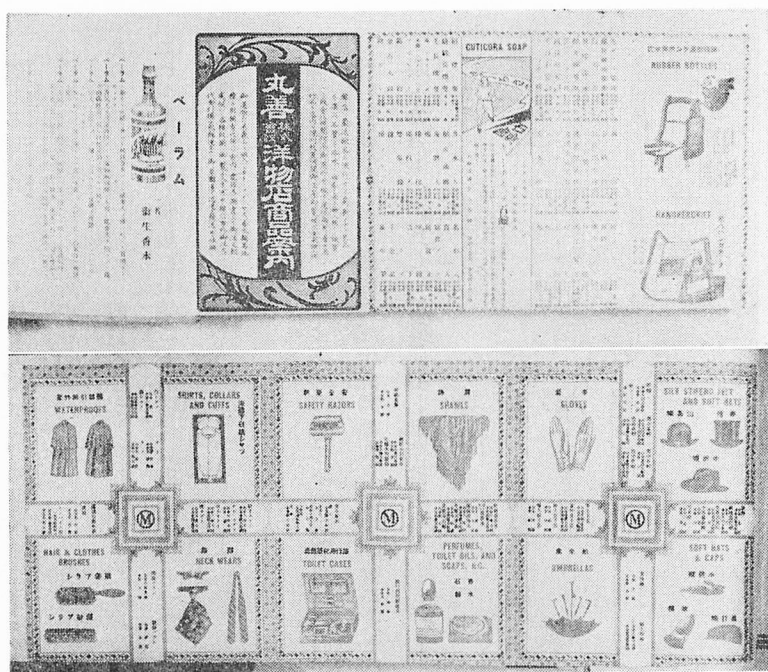
及内國用共有之候)

新應匠
入金五十五錢宛
一組金五十錢宛



繪葉書廣告

師寺所伝の舞樂の面、第三は藤原式古写経扇面
 地の秋草模様と時勢粧、第四は叡島経卷、第五
 は備前某寺所蔵の異本餓鬼草子、第六は法然上
 人絵巻物、第七は一遍上人絵巻物、第八は百鬼
 夜行絵巻物、第九は関白秀次の局の桂衣模様、
 第十図は寛永年間の古屏風、第十一と十二はと
 もに光琳模様である。あんまり高尚すぎて、果
 して売れたか、どうかは怪しい。三十六年十
 一月には、輪郭の中に
 「クリスマス及新年のカード竝に歳末歳始
 の御進物に適するクローム画本、美装小説
 類、縮緬紙摺美本、『誕生日』、美術画端書、
 石膏レリーフ、文鎮、その他文房具諸品等
 文明的の御進物無数取揃へ陳列致し置候間
 御立寄御高覧被下度候」
 の広告があり、上に洋服読書人のカットをはさ



洋物店商品案内

んで、

「文明的の進物は丸善の売品に限る」

「見て面白い、読めば為になる、飾れば
装飾となる」

の標語を置いている。文明ということを標致
した丸善の誇りを見る。経済的悲境から金原
明善の指導によって、緊縮政策、健全財政を
おこなった効果が急に現われ、好調に向った
丸善の年末の店頭は紅紫繽紛、百花繚乱の景
観を呈した。はさみこみ広告には「丸善株式
会社洋物店商品案内」があり、

「弊店は最近欧米に流行せる嶄新なる良
品を撰み品質を吟味し四季毎に輸入致し
誠実に販売仕候間何卒御用仰付被下度候
尚新着の流行品は店内に陳列致置候間御
立寄御覽被下度奉願上候。御進物には美

麗なる函入ハンカチーフ、メリヤス、香水類其他種々取揃有之候○市内は電話又は端書にて御注文相成候はば各種取揃御覧に入れ可申候○市外御注文は代金引換小包郵便にて御差図通り迅速に発送可仕候」とあり、表から裏にかけ、前頁のような図面が入っている。

これと前後して明治三十年ごろから「御進物用切手」(のちの商品切手)を発行して、しきりに広告をしだしたのが目だつ。

御進物用切手。

弊社御進物用切手の義は金額の多少に不拘調製可仕候間何卒御注文の程奉願上候且右切手は下記の各店と共通致し書籍文房具薬種唐物品化粧品等御必要の品物に就き御便利の店に於て御引替可仕此点に付ては他店品種の単一なるものに比し一層御便益と奉存候

東京日本橋区通三丁目

丸善株式会社 書籍、洋物店、文房具

大阪心斎橋筋博労町

丸善株式会社支社 書籍、文房具

横浜弁天通二丁目

丸屋書店及薬店

神戸元町一丁目

丸屋出張所 書籍、薬種

これが日露戦争直前までの、丸善の全貌である。